平和フォーラム2025　開催報告②

仏教の可能性を未来に開く

～戦後80年、「平和」創造に向けて～

2025（令和7）年、日本は戦後80年を迎えました。浄土真宗本願寺派には、戦前、無批判に国策に従い、仏教の名のもとで戦争を正当化し、積極的に加担した歴史があります。戦後、それへの反省から、「平和」に向けたさまざまな取り組みを行ってきました。また、世界でも戦争が起きぬよう、たゆまぬ努力がなされてきたものの、多くの戦争や紛争が起き、現実に「いのち」の尊厳をふみにじる事態が生じています。このような国内外の情勢のなかで、誰もが心安らかに日々の生活を送ることのできる、平和な世の中を未来に開いていくために、仏教・浄土真宗はどのような可能性を有しているのか。「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」という理念を掲げる私たちは、どのように現状に対峙し、「平和」のために何ができるのか。真の「平和」に向けた道筋を考えるために、2025（令和7）年4月14日、本願寺聞法会館において「平和フォーラム」を開催いたしました。

「平和フォーラム」は、第1部と第2部の構成で行われました。第1部では、園城義孝総長より「戦後80年にあたっての平和を願うメッセージ」が発せられ、その後、釈徹宗先生（相愛学園学園長・武蔵野大学総長）、赤松徹眞先生（本願寺史料研究所所長）、寺本知正総合研究所副所長による鼎談、第2部では、映画「ドキュメンタリー沖縄戦～知られざる悲しみの記憶～」の上映が行われ、それぞれ、戦後80年を生きる私たちとして戦争と平和を考える機縁となりました。

今回は、前号に引き続き、「平和フォーラム」第1部・鼎談のうち後半の内容をまとめて報告いたします。

（浄土真宗本願寺派総合研究所）

交流と対話の可能性

○寺本　日本が経験した戦争から80年を経て、さまざまな記憶が薄れつつあります。社会からも生々しい記憶といったものが薄れつつあります。今でも、その記憶を引き出すことは大切だと思います。

一方で、2025（令和7）年4月現在、ガザ・イスラエル、ロシア・ウクライナなど、さまざまなところで戦争・紛争が起きています。日本にも、例えば、ウクライナから受け入れている留学生が各大学にいらっしゃると思いますが、その方々との交流と言いますか、その方々の声を聞く。今、どのような状況にいらっしゃるのか、どのような心持ちでいらっしゃるのか。まず、そうした声を聞いていくということも非常に大切です。

○釈　もう15年ほど前ですけれども、パレスチナの難民キャンプに連れていってもらったことがあって、イスラエルでも、ユダヤ教の宗教者で、「今のイスラエルの政策が間違っている」という声を上げて活動している人と何人も会いました。われわれは、そういうところにつながっていくという道はあります。

例えば、ヤコヴ・ラブキンというイスラエルの歴史学者がいます。この人は明確に、今のイスラエルのやり方、シオニズムはユダヤ教に反しているというような著書・論文をたくさん書いておられますので、そういう視点を持った人はもちろんおられます。日本仏教界としても、そういった方々と協力するということはできると思います。

考えてみたら、イスラエルのユダヤ民族は迫害されてきた人たちじゃないですか。それが、今あんなひどいことをするというのは、おそらくある種のトラウマみたいなものがあって、一歩でも譲れば自分たちは踏んで通られるというような、恐怖感みたいなものがあるんじゃないかと想像します。だから、イスラエルは絶対に譲らない。アメリカに言われても譲らない。まさに負の連鎖というか、特定民族をひどく迫害すると、結局、また世界が苦しむことになっていくという、そういう流れとなってしまう。

これは仏教が説くとおりです。

怨みに対して怨みをもって報いるならば、怨みのやむことはない

（『ダンマパダ』）

こういうことですよ。だから、巨大な暴力・迫害・差別で、結果的に、長い間、人類の多くが苦しまなければならなくなることの証左だと思うんです。

パレスチナで難民生活している人たちも、以前は普通に家を持ち、仕事もしておられました。家族もごく普通に、裕福に暮らしていた人たちが、戦争が始まったので、いったん避難した。そのまま80年帰れない状態になっているので、もう孫の世代になっています。難民生活は、ものすごくストレスが強いので、やっぱり荒れるんです。

そこに日本のNGOが、日本の幼児教育を持ち込む活動をしています。これがものすごく現地で喜ばれて感謝されてい

る。幼稚園や保育園で、みんなで一緒に歌を歌ったり、絵本を読み聞かせしたり、ダンスしたりするのは、われわれの暮らしではごくごく当たり前のように思うんですけど、世界ではどこでもやっているわけではない。

その幼児教育や保育理論を日本からパレスチナ難民キャンプに持ち込むと、すごく子どもたちが安定したというようなことを言っておられたので、僕も幼稚園や保育所を見学させてもらったんですよ。ある幼稚園にガラガラって入っていったら、女の子が一人「ぎゃああ」と言って、部屋の隅っこに行って震えていました。どうしたのかなと思って、「すみません、脅かすつもりはなかったんですけど」と言ったら、「いいんです、いいんです」と、先生が「知らない男の人が入ってきたら、こうなんです」って言われました。お父さんとお母さんとその子と寝ている寝室にイスラエル軍が突然入ってきて、お父さんを連れていったまま、ずっと帰らないという状態で、そこからそんなふうになったそうです。

先ほども申しましたが、経済状態が悪化すると戦争になる可能性が高いのであれば、よりよい経済というような取り組みだって、もちろん平和の活動でしょう。例えば、食料自給率を上げるというのも、わが国にとっては大きな問題だと思います。あるいは、幼児教育の取り組みだって平和活動です。例えば、宗教教団ならではのネットワークを使って協力するということが可能ではないかと思います。

○寺本　そうですね。浄土真宗本願寺派では、幼児教育の非常に高いノウハウと経験を持っておりますので、貢献できる面は大きいとあらためて思います。

さて、赤松先生より、「アジア」という言葉を挙げていただきました（前号参照）。「戦後問題」検討委員会においては、特に仏教徒との交流が取りあげられました。実際、アジアの仏教徒の中では、紛争や戦争に仏教徒が関わらざるを得ないというような状況もございます。戦前のことですが、中国の仏教界から盛んに日本の仏教界に「愚かな戦争をやめさせてほしい」と何度も書簡が届いたけれども、日本の仏教界はそれを無視してしまったという話を聞いたことがあります。過去への反省に基づき、今のアジア各地での仏教徒との交流といったようなことで、何か私たちが具体的に取り組んでいけるようなことは、ありますでしょうか。

○赤松　私たちは「平和」の対となる言葉が「戦争」と言ってしまいますが、「平和」ということの中には、「交流」と「対話」という言葉が重要だと指摘されています。

アジアのそれぞれの地域には、中国にしても、韓国にしても、あるいは東南アジアの国々・地域にしても、仏教がいろんな特徴を持って展開しているものがあります。そういった国々・地域の方々と交流と対話をする。私たちは、そのような場、機会を持つことを積極的に呼びかけていく。それぞれの主張・意見などが違ったとしても、そこにいる人と交流・対話をしてみたら、無視したり、軽視したり、あるいは排除するという関係ではなくて、その存在を尊んでいくような関係を、環境を、社会を形成していくことができる。交流・対話の場を提供する側、呼びかける側の熱意が伝わっていくならば、実現していくのではないかと思います。その関係は、民間の国際交流として意義深いものではないかと考えます。

仏教界の僧侶を通して、その国の多くの人びと、仏教徒の方々に対しても、交流・対話のメッセージが届き、広がっていくと思います。手がかりとしては、仏教につらなる方々と共に集う場所を、教団としてもつくり出していく。政治のレベルの話ではなくて、仏教界同士のコミュニティー、共同性として、意義があると思います。

アジアだけに限らず、アメリカにも、ヨーロッパにも、真宗教会が多く設立されています。そういう方々とも交流・対話していく。EUという地域社会において、仏教徒の集まりができれば、そこで仏教・浄土真宗の平和に向けてのメッセージが広がりを持つことも、可能性と

◉釈　徹宗（相愛学園学園長、武蔵野大学総長、浄土真宗本願寺派如来寺住職）

龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程、大阪府立大学大学院人間文化研究科博士課程（比較文化専攻）修了。兵庫大学教授などを経て、現在に至る。博士（学術）。専門は、宗教学、比較宗教思想。第５回涙骨賞優秀賞、第51回河合隼雄学芸賞、第51回仏教伝道教会文化賞・沼田奨励賞を受賞。著書に、『日本宗教のクセ』（内田樹氏との共著、ミシマ社、２０２３年）、『お経で読む仏教』（ＮＨＫ出版、２０２０年）、『歎異抄　救いのことば』（文春新書、２０２０年）、『落語に花咲く仏教　宗教と芸能は共振する』（朝日選書、２０１７年）、『日本霊性論』（内田樹氏との共著、ＮＨＫ出版新書、２０１４年）、『法然　親鸞　一遍』（新潮新書、２０１１年）、『仏教入門　親鸞の「迷い」』（梅原猛氏との共著、新潮社、２０１１年）、『親鸞の思想構造』（法藏館、２００２年）ほか多数。

して生まれ、つくり出していけると思います。

「非暴力」と平和

○寺本　宗教間の対話に関しましては、釈先生はたくさんのご経験がおありかと思います。異文化、異宗教間の対話・交流ということから、平和に関して得られてくるものはありますでしょうか。

○釈　宗教団体というのはそもそも同質性の高い集団です。そういう意味では、他集団と他領域との対話の架け橋といいますか、多様な回路を開くというのは、よりよい教団を目指すためには必須条件というふうに、ずっと思っております。

少し仏教と真宗教団の特徴について言及しますと、まず、「平和」の反対が「戦争」というわけでもないと僕も思います。平和というのはある種の状態ですので、例えば、軍事力による平和とかも成り立つわけです。

一方で、仏教の場合は、「非暴力」という問題が出てきます。出家者にとっては、仏教は徹底した非暴力ですので、とてもわれわれは実行できそうにもないような内容が説かれます。例えば、ニカーヤに出てくる『鋸喩経』というお経によると、自分の家族を殺されても、自分の手足をのこぎりでひかれても、怨むこころを起こしてはいけないと言うんです。仏教の説く「非暴力」は、家族を殺されようが、国が滅ぼうが、非暴力を貫く。もうできそうもない、そんなところが出家者、出家集団の教えになります。

一方、仏教における在俗、世俗の問題は、やっぱり平和なんですね。仏教は、こういう社会でなければならないというような理念はあまり出さないんですけれども、落ち着いた穏やかな状態の社会を望む。それであれば、口出ししないというか、積極的に社会改革をしようとしないという、そういうタイプの宗教かと思います。われわれは、やはり在家仏教の教団ですので、はるかかなたにある「非暴力」を目指していかなければならないのですが、まずは平和への取り組みというのは、教団としての特徴になるのかなというふうに思います。

ご存じのように、ブッダも自分の国が滅ぼされるのを座視して見ていたということがあります。出家集団はそうなりますが、ただ、ブッダのころの戦争と今とでは全然フェーズが違います。かつての戦争というのは、それぞれが代表選手を出して、いわばルールが決まったリングの上で殴り合って勝ち負けを決めるみたいなことになっていたんです。だから、軍隊をそれぞれ備えていて、国の代表選手として戦うということなので、ここだけ法律も別なんですね。軍法という法律で仕切られていて、いわば世俗社会とは違うカテゴリーに置かれるわけです。それで、ちゃんとルールに則って戦って勝ち負けを決めるとなっていました。しかし、国民国家が形成され、総力戦になって、ナポレオン以降、大変なダメージを受けてしまう戦争のかたちになっていきました。なおかつ第1次世界大戦以降、大量破壊兵器と非人道兵器が開発されたがために、人類史上、戦争で死んだ人のほとんどは、おそらくこの100年から150年の間という状況です。

だから、なかなか仏教の教えから抽出して、今の戦争を論ずるというのは、かなり難しいところがあると考えています。やはり、大量破壊兵器とか非人道兵器に声を上げていかねばと思います。

阿弥陀仏のはたらきをいただく者として

○寺本　宗教教団は、望む望まないにかかわらず、社会との接点を持ちます。社会から完全に切り離されて存在しているというわけではありません。そうした中で、宗教教団の発する言葉は、社会に対して非常に大きな影響力を持つと思います。

そもそも私たちの教団は、社会の多数を占める大きな集団なのか、あるいはマイノリティー、小さな集団なのか。私たちの社会における立ち位置というのは、どのように捉えていったらよいのでしょうか。

○赤松　比較指標の見方によって、認識の仕方は多様です。例えば、仏教だけに限定して各宗派の比較をすれば、寺院数、教団の規模、あるいは門信徒の数、そういう比較数値表は、いろんな統計資料に出てきます。それを対比すれば、比較的大きな宗派として、浄土真宗本願寺派や真宗大谷派などが挙げられると思います。

ところが、そういう認識に留まっていていいのかと思います。浄土真宗というみ教えに帰依している僧侶・門徒は、日本に限っていえば、約1億2000万人の総人口の中でどれほどのパーセンテージを占めているのだろうかと。そういう視点で考えれば、決して過半数でもな

◉赤松徹眞（本願寺史料研究所所長）

龍谷大学大学院修了後、龍谷大学文学部講師、助教授、教授を経て、龍谷大学名誉教授。専門は、日本仏教史、真宗史、近代史。著書に、『近代真宗者の「神社問題」論説集成』全9巻（三人社、2019年）、『日本仏教史における神仏習合の周辺』（永田文昌堂、2013年）、『資料 清沢満之』全3巻（共編、同朋舎出版、1991年）、『『新佛教』論説集』全4巻（共編、永田文昌堂、1978～1982年）など。論文に、「淺野研眞の思想と社会的実践―仏教理解とその実践としての仏教社会学及び仏教社会事業―」（『仏教史研究』60、2022年）、「大谷光瑞の『満州国』論から『大東亜共栄圏』論―大谷の仏教・真宗論の立場との関係―」（『仏教史研究』58、2020年）など多数。

く、もちろん多数派でもなく、圧倒的に少数という実情です。

しかし、浄土真宗のみ教えを依りどころとする念仏者として、苦悩をかかえる生きとし生ける人たちに対して、阿弥陀仏のはたらきという普遍的かつ根源的な、一切衆生の救済という、み教えに出遇ってほしい、み教えを伝えたい。つまり伝道活動の使命から言えば、可能性は限りなく広いものとしてあるはずです。み教えを伝えるとともに、平和に関わる交流・対話を広げてゆくという実践的な認識を、私たちは持たないといけないのではないかと思います。

今回のテーマにありますように、仏教の可能性、あるいは浄土真宗の可能性というのは、人びとの苦悩、平和に関わる危機認識に立つならば、開かれています。可能性を開いていくのは、浄土真宗の念仏者一人ひとりがわが歩みとして取り組み、あるいは連携して共に取り組むことこそが、み教えの広がりとともに、争いや暴力を解消し、人間の尊厳が、人権が確保される社会をつくることになって、まさにその点で大きな役割があるのではないかと考えます。

○寺本　私たち一人ひとりは、仏教が言うところの非暴力に本当に徹していけるのかというと、非常にハードルが高いものがあります。ただし、なんらかのかたちで関わっていくこと、最初の一歩を踏み出すことが非常に大切で、そこで初めて、ハードルの高さといったものを自覚できてくる、というお話がありました。

一人の念仏者として、平和に取り組むうえで、私たちがどのように平和ということ、非暴力ということ、反戦ということ、それをいかに内省化しながら現実社会と対峙していくかということかと思います。一人の念仏者として、一人の仏教徒としての平和への取り組みを、仏教の文脈のうえで、念仏の文脈のうえで、どのように捉えていくべきでしょうか。

○釈　仏教の文脈のうえで言うと、近年印象深い事件がありました。スリランカのウィシュマさんという人が入管で拘束されて亡くなられた事件です。

あのときにご家族が来日されて、インタビューに答えていたんですけども、「怨みに対して怨みをもって報いるならば、怨みのやむことはない」とおっしゃっていました。先ほども紹介した『ダンマパダ』の第5偈です。スリランカの人はこういうことを普段から言うのですかね。そして、「怨みを持っているわけじゃないけれども、ちゃんと情報公開してください」と言って、裁判を起こした。入管が情報を隠していたものですから。それと「二度とこんなことが起きないようにしてほしい、というのが希望だ」とおっしゃいました。

実に仏教的な態度だなと思いました。われわれは、ちゃんと社会に対して、社会制度の具合の悪さに対して、声を上げていくんですけども、仏教者としての態度、ありさまというのがあると思ったんですよね。

翻って考えると、われわれ念仏者は、世俗を生きることがそのまま仏道です。

例えば、お商売するにも、念仏者は念仏者のお商売の仕方があるんじゃないかと取り組み、特有の商業倫理を生み出してきた歴史があります。だから、念仏者として、どうこの問題を考えるんだという視点で常に取り組んでいくことが肝要かと思います。

それともう一つは、今日の総長のメッセージにもありましたように、

さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし

（『歎異抄』、『註釈版聖典』844頁）

です。「聖道の慈悲、すえ通らず」「この慈悲始終なし」（『註釈版聖典』834頁）。常にそこに立ち返る。その立場で葛藤するというところにこそ、念仏者としてのあり方があると思うんです。これは、僕自身もよく導かれている浄土真宗の教えです。

いろいろ社会活動したり、認知症の方の施設を運営したりしているんですけど、本当に時々、浄土真宗の教えが耳元でささやいてくるんですよね。「おまえ、いいことしているつもりになったら駄目だぞ。聖道の慈悲、すえ通らずだ」と、いつも教えからささやかれているような気分になっています。だから自分は何十年も続けられているという思いがすごくあります。そういう意味では、ここに常に立つというのは、この教えをいただく者の道だろうと思います。

ただ、活動自体は、念仏者独自のものでなくていいと思うんです。自分自身がそこに立って活動するけれども、志を同じくする人と協力したり、連携したり、他の領域の人と工夫したりしていくんです。

◉寺本知正（浄土真宗本願寺派総合研究所副所長）

龍谷大学文学研究科博士後期課程、同志社大学神学研究科博士課程前期課程、大阪大学文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。龍谷大学非常勤講師、京都女子大学非常勤講師、京都産業大学非常勤講師、岐阜県立看護大学非常勤講師、日本キリスト教協議会（NCC）研究所研究員などを経て、現在に至る。著書に、『お念仏との出会い―ヨーロッパ念仏者のインタビュー―/Encounter with the Nembutsu Way ―Interviews to European Nembutsu Friends―』（永田文昌堂、2001年）。論文に、「ヨーロッパの宗教事情と日本人の宗教性」（『宗教研究』第86巻4輯、2013年）、「A Problem of modern Shin Buddhist Studies ― from the viewpoint of Barth's criticism of liberal Protestant Theology―」（『The Pure Land』New Series Nos.21、2004年）、「戦後真宗学の動向―阿弥陀仏理解と思想史的研究に関して―」（『宗教研究』第75巻4輯、2002年）など。

さまざまな暴力を超えて

○赤松　先ほど釈先生が「非暴力」という観点をおっしゃいました。戦争も明らかに暴力であり、軍事以外のさまざまな暴力もあり、戦争に関わる兵士にしても、暴力につながっていくということがたくさんあります。

２０２５（令和７）年度の園城義孝総長のもとでの総局の「宗務の基本方針」では、３項目に「平和への取り組み」があります。４項目には、「宗門におけるジェンダー平等の推進」があります。このジェンダー平等と、平和、人間の尊厳性、人権などが関連してきます。例えば、男らしさ・女らしさ。固定的な男らしさ像のところに、暴力的な力、逞しさ、権力などの像をもとに、社会によくある女性へのＤＶ・性暴力、戦争における性暴力というものが起こってくるわけです。

私たちの現代の社会の環境の中においても、性暴力に関わる事件などが起こっています。それは、社会的に、文化的につくられた固定的な男らしさ、男性イメージなどへの問いを持った見直しをすることへの関心が希薄ではないでしょうか。いわゆるジェンダー平等推進は、平和問題とも重なり合うところがあると言えます。

社会の出来事の中にも、非暴力の重要性というのは、戦争に関わっても、あるいは日常の中においても、仏教あるいは真宗のみ教えを依りどころとする念仏者の言動として、自らのありようを問い糾しながら、歩んでいくことなのではないかと思います。

○釈　暴力で言いますと、少なくとも日本は80年間、軍隊を出して攻撃して殺害したりはしていないというのは、国際的な大きなアドバンテージだと思います。きっとこの営みは高く評価されているに違いないと思います。そのことによって、できることがまた生まれてくる。もちろん、実質的に戦争の後方支援をしたり、日本にも軍需産業があったりはしているのですが、軍隊の銃弾で殺害されたということは避けられている。80年間ですよ。だからこそできる役目というのはあると思います。

今は平和維持活動という名目で自衛隊が派遣されるんですけど、湾岸戦争のときは「うちは憲法で禁止されているので駄目なんです」と、アメリカに何と言われようと出さなかったことがありましたよね。こういうことを、例えば、仏教の側からどう評価するか、仏教者はそれをどう考えるのかというのは大事だと思います。

一方で、核兵器禁止条約は、批准どころか出席もしないというのが続いております。唯一の被爆国であるわれわれの国がそんなことでいいのかということですね。同じような事情を抱えているヨーロッパの国でも、ちゃんと会議に出席したりしています。この問題も、やっぱり考えなければならないと思います。

○寺本　平和とは何か。そのためにどのような取り組みができるのか。理論的なレベルで考えていくと、行き詰まってしまうような部分が出てきます。しかし、日本は80年間、戦争では一人も殺していない。平和に向けてこのように取り組んできた。戦争にこのように対してきた。そうした戦後の取り組みがあります。

一方で、教団はこれまで十分には何もしてきていない、戦争をしっかりと反省していないということも言われたりします。しかし他方で戦没者追悼法要での取り組みも継承しておりますし、さまざまな平和への取り組みを教団は行ってきております。原理的に批判するだけではなく、現実にこのことに取り組んできているんだということをきちんと評価し、それに基づいて私たちのこれからの取り組みといったものを、考えていくべきであろうと思います。

人間のあり方を見つめ直す

○寺本　釈先生からは、念仏者としての社会への取り組みということで、いつもみ教えから「おまえ、いいことしているつもりになったら駄目だぞ」というささやきがあるとおっしゃっていただきました。活動自体に、念仏者として、他とは違う独自のものを必ずしもやる必要はないと、私も思います。

仏教徒、特に浄土教徒として、自分が全てをかけて平和を望むことができる。そんなに立派な人間でもありません。非暴力を徹底できるような立派な人間でもありません。それを望むこころさえ、本物ではない。思い知らされてくるのは、私たち自身に対する自己認識であり、私たちの生きる世界にはどこまでも「まこと」がなく、完全な平和といったものが実現することはない。この世はあくまでも穢土であると知らされていくのが、また浄土教徒の自己認識でもあると思います。

問題は、そう知らされたうえで、それでも平和を望み、平和に関して何が言えるのか。何ができるのか。そんな問題が私たちに突きつけられていると思います。

赤松先生からは、戦前の「帝国憲法」、そして「教育勅語」を基とした人間形成、このことを最初におっしゃっていただき、また、ジェンダーと平和との関わりをご提言いただきました。このジェンダーの捉え方、いわゆる理想とされる男性像。非暴力と反対に、ジェンダーにまつわる事柄が人間を形成していく。そうした人間の形成ということも、平和に関して取り組むべき課題の一つであると感じます。

戦後50年の「戦後問題」検討委員会答申において、「人間像の検証」が課題として出されておりますが、それは戦中の人間像だけではなく、現代を生きる私たちが、女らしさ・男らしさというものを固定的に捉えてはいないか。そのことも、きちんと検証していく。これが戦後、戦争への反省に基づいた平和に向けての取り組みとして、今、私たちがなすべきことの一つであると捉えてよろしいでしょうか。

○**赤松**　固定した人間像の方に合わせることは摩擦が少ないとも言えますが、しかし、基本的には生きづらさをもたらしています。私たちは、時に「全てをかける」とか「完全な」という言葉をもって、できないことを説明してしまう傾向があります。相反する、二元的な思考とそれに伴う言辞をもって、その間の複雑性を考えず、あるいはうんざりして、複雑性を切断・裁断して、二項に陥りやすい言葉を使いがちなところがあると思います。

だから、特に何か深く考えていそうで、つい言辞で先取って制約してしまっているという面があるのではないかと思ったりもします。一見、深く考えていそうで、その言葉で自らを修飾し、縛って、その中に安心して、現実を直視して、向き合わなくなってしまっている。

私たちにもできない面も、不可能性もかかえているわけです。重々そのことを認識し、自覚したうえで、何に取り組むのか。その際に、男らしさ・女らしさといった、二極化したような固定的な像というのは、明らかに現実の中で揺らいでいるし、それぞれの男性にとっても、男らしさ像の固定的なものを背負って歩むことについての、生きづらさ、生きにくさというものを感じている男性の方も多くいると思います。

そういう自縛の中で歩んできた面も、自己の中に抱えているのではないかと思ったりします。さまざまな人の存在の尊厳を認めながら、一人ひとりを肯定していく。そういうあり方が重要なことになっていくと思います。

社会組織の中では、時間経過の中で固定的な人間像が求められることが多くありますので、そういう方向に傾きやすい。しかし、暴力という行為の中に現れるのは、二極化したところに振れてしまい、それぞれの存在の尊厳性を見失っていく。あるいは人権を侵害する。さらに社会通念や習慣、しきたりなどのところにおいても、性に関わる公平感が失われているという現実のありようにも気付いていく、そういう学びも大切ではないかと思います。

念仏者としての学びと継承

○**赤松**　宗派の歩んできた道の中にも、平和を願いながら、歴史を刻んできた足跡というものがあります。学ぶべきところを繰り返し学び、継承していくことが求められます。戦後50年のとき、即如ご門主は、大きな転換点となるようなご親教をお示しされているので、それを学んでいくことが重要です。

3年前（2022〈令和4〉年）になりますけれども、全国の寺院を対象にした『本願寺派寺院と戦争』という調査報告書がまとめられております。その結果を見ますと、記憶に残っている、あるいは、よく知っているという割合は、世代によってずいぶん変わっています。戦後80年と言いましても、戦後50年にあたる1995（平成7）年からいっても30年経ちますから、一世代の交代があると言えましょう。世代を超えてどのように継承していくのか。

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要は、1981（昭和56）年から修行されています。この法要が修行されていることを、「知っている」という方は90％ぐらいと多くおられます。だからといって、「千鳥ヶ淵の法要に参加したことがある」という方は3割強ぐらいです。このことは、機会があるごとにそういう場に赴いて参拝してみる。世代を交代しながら継承していくということも十分念頭に置かなくては、風化しかねない危惧があります。

特に今年は、戦後80年なので、1945（昭和20）年、全国各地で、都市部もアメリカ軍の激しい爆撃を受けて、多くの犠牲者を出し、焼失したという別院も各地にあったわけです。戦後しばらく経て、別院の復興に向けて、地方の僧侶、門徒の方々がずいぶんご苦労して、ご寄付されて復興に立ち上がられたのです。この80年という機会に、戦争に関わる教団責任の問題も当然ありながら、地方拠点としての別院の復興に多くの方々にどんなご苦労をいただいたかということについてもあらためて振り返り、私たちもそこから学んでいく。今年はさまざまな工夫をしていただきながら、各地で、戦争犠牲者・戦没者の法要や平和の集い等々を開催して、皆さんの非戦・平和へのメッセージを、広く社会に発信して、多くの人びとに呼びかけていただければと思います。

○**寺本**　全国各地の別院・教務所は、空襲によって焼失したが、私たちはそれぞれの地で復興させてきた。こうした各地での取り組みの調査研究も、今後進めていきたいと思います。

私どもはみ教えに生かされ仏道を歩む者でございます。今年は戦後80年ということで、平和に関して、どのような生き方を歩むべきでしょうか。

○**釈**　浄土真宗は、世俗社会を生きる、それが仏道というような特性を持っております。『真宗宗歌』に「六字のみ名をとなえつつ　世の生業（なりわい）に　いそしまん」という、世のなりわいにいそしむ、そのままが仏道なんだというような、そういう特性を持っているからこそ、独特の商業倫理も生まれ、文化も生まれ、時には芸能も生み出してきました。真宗教団というのは、裾野がすごく豊かなところに特徴があると思います。

もちろん、世のなりわいに誠心誠意い

そしむだけでは仏道になりません。「六字のみ名をとなえつつ」、口にお念仏をとなえながら、誠心誠意、社会生活や家庭生活を営む。それがわれわれの教えです。だからこそ、真宗文化が花開いたわけです。

大阪で言いますと、北御堂と南御堂を中軸とした船場という地域は、ほとんど真宗門徒でした。例えば、長島門徒、近江商人、大和門徒、各地からやって来て、御堂さんの鐘が聞こえるところでお店を出したい。お寺の屋根が見えるところでお店を出したい。そうして、御堂周りに集まり、そこに独自の商業倫理も生まれ、そして文化もたくさん生まれました。しかし、第2次世界大戦の大阪空襲で全部焼け野原になりました。両御堂ももちろん焼け野原。船場も壊滅。元に戻らないんですよ、船場文化も。船場の真宗文化は、ほぼ絶滅しています。

戦争というのは、その人のいのちとか建物とか品物を壊すだけじゃなくて、これまで連綿と紡いできた思いもなくしてしまいますし、文化だってつぶしてしまう。そんなふうに考えますと、われわれは、先人から受けたバトンをちゃんとまた次につなぐために、やるべきこと、向き合うべき課題として平和の問題がある。そんなふうに思います。

○寺本　「世の生業」というものも、さまざまにあります。また、真宗教団という一つの教団として、その中には、教区、組、寺院があります。真宗の文化、真宗の取り組み方というのは、非常に幅の広い、底の広いものであるとおっしゃっていただきました。

それぞれの教区や組、お寺でも、戦後80年の取り組みは、決して同一のことをしなければならない、誰しも、いつでも、どこでも、まったく同じことを義務としてする、というようなことでは決してないと思います。それぞれに取り組んでいく。それぞれが生き方のうえで主体化していく。その総体が宗門の平和への取り組みにとって大切になるのかなと思いました。

本日は、長時間にわたりまして、釈先生、赤松先生、この鼎談を盛り上げていただき、誠にありがとうございました。それでは、これをもちまして、「平和フォーラム」第1部の鼎談を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

（第1部・鼎談終了）

閉会のあいさつ

総合研究所所長（当時）　**大田利生**

「平和フォーラム」第1部の終わりにあたりまして、一言ご挨拶申しあげます。

本日は「平和フォーラム」にご来場賜りまして、誠にありがとうございました。鼎談にご登壇いただきました先生方にも厚くお礼申しあげたいと思います。

私自身、戦中の生まれでございますが、戦争の記憶はほとんどありません。ただ、古い記憶をたどっていきますと、防空壕に入っていたことをかすかに覚えているくらいです。しかし、それ以外のことは、具体的なことは、本当に覚えておりません。ですので、私の出身は広島ですが、戦争の話は、大きくなってから、家の者とか周りの人たちに聞いたり、写真などの記録を見たりすることによりまして、知ることが多かったのでございます。

戦後80年を迎えまして、戦争の悲惨さを語り継いでいく戦争体験者が高齢化するとともに、少なくなっている時代におきまして、戦争の記憶と継承が困難になっているのも事実です。しかし、未来につなぐことができる「平和フォーラム」を開催できましたこと、これは誠に意義深いことだったと思っております。

今後も学びを続けながら、戦前、戦中、戦後にどのようなことがあったかということはもちろんですが、それら戦争の中に宗門がどのように関わってきたかということについてもしっかりと向き合って、未来の子や孫世代に伝えていくことが、宗門の役割なのではないかと思うことです。そして仏教、浄土真宗の教えに基づいて、平和への道筋を探っていく、道筋をさまざまに模索していく。そういうことが大事なことではないかと思うことでございます。

本日は、「平和フォーラム」にご参加くださった皆さま、重ねて御礼申しあげたいと思います。ありがとうございました。